

口より血をながし、大あせ水になりてくひたりけるを、わらひ草にしてくはせけるより人のさしてもなき事をほめあげ、かしづきなどするを、大こんくる、と申とうけ給及侍りしなり。

〔新撰字鏡〕蔓亡

怨反、長也、蓮葛花也、阿乎奈、封

封也、纏根阿乎奈、菁

聰明草 阿乎奈

〔本草和名〕菜十八

蕪菁、仁謂音無、一名蔓菁、北人名之、又有莘根、仁謂勞蔓菁、一名薑、陳楚名也、一名

大芥、趙魏辛芥者、一名幽芥、已上五名出菟延子、子也、出神經、七卷食經

菟延子、仙服御方、一名九英、出拾

和名阿乎奈

〔倭名類聚抄〕園菜

蘇敬本草注云、蕪菁、武青北人名之蔓菁、上音變、和揚雄方言、陳宋之間蔓菁

曰封、封音

蔓菁根

毛詩云、采葑采菲、普無以下體、○布良加。

注云、根莖也、此二菜者蔓菁與薑之類也、

〔類聚名義抄〕

抄八、蔓菁、アヲナ、蔓菁根、カブラ、

蔓菁、アヲナ、蔓菁子、ナタ子

〔易林本節用集〕

草阿木、蔓菁、アヲナ、蔓草、カブラ、

蔓草、カブラ、

〔和爾雅〕

七、蔬、蕪菁、アヲナ、蔓菁、アヲナ、蔓菁、アヲナ、蔓草、カブラ、

蔓草、カブラ、

〔東雅〕

穀十三、蔓菁、アヲナ、蔓菁、アヲナ、蔓菁、アヲナ、蔓草、カブラ、

蔓草、カブラ、

〔蔓菁〕蔓菁アヲナ、倭名鈔に、蕪菁一に蔓菁並に讀てアヲナといひ、薑はク、タチと云ふ、俗に莖立の字を用ひ、蔓菁根はカブラ、毛詩の下體は蔓菁與薑之根莖也、蔓菁を大芥とし、小者を辛芥といふ、辛芥はタカラ、辛菜はカラシ、俗に芥子の字を用ひと註せり、アヲナとは、アヲナは青也、ナとは我國の俗、凡菜蔬類を呼びし總名也、ク、タチは即莖立也、カブラといふ義不詳、大己貴神の、其父神の大野の中に入れ給ひし鳴鑄を、採りて奉られしといふ事、舊事紀古事記等にみえて、鳴鑄讀て又カブラといふなり、古語相傳しには、鳴鑄はもとメカブラをもて作り出しければ、また名づけてカブラといふかともいふなり、メカブラとは海藻の根をいふ也、さらば古語にカブラといひしもの、蕪菁根をのみいふにあらず、凡物の下體をいひし也、今俗は蕪菁根をのみ、カブラあらず、蕪菁の根をも、薑の根をも、又海藻根の如きをも、カブラとは云ひけり、倭名鈔に釋名を引て、筋足を鑄と云ふと見えたる、人の脚筋をコムラといふも、猶カブラといふが如し、カブラとい引